

## 『源氏絵本藤の縁』の本文

——梗概書との関わり——

### 一 はじめに

江戸時代になると、源氏物語やその梗概書が挿絵付きで相次いで出版されるようになった。管見に及んだ十三件について、その版本の挿絵に描かれた男女の人数を計算したところ、女性の方が多いのは『源氏絵本藤の縁』(以下『藤の縁』と略称す)のみであった<sup>①</sup>。当作品は五十四帖の各帖から一場面ずつ取り上げ、方舟子が本文、長谷川光信が絵を担当して、寛延四年(一七五二)に刊行された。挿絵に選ばれた場面を調べると、全五十四図のうち四十二図は前例があることに基づき、以下のように判断した。

『藤の縁』の本文を著した人は、源氏物語を元に梗概化したのではなく、絵にすべき場面を抜き出した『源氏物語絵詞』<sup>②</sup>のようなテキストを利用したのではなからうか。その際、巻名歌

『源氏絵本藤の縁』の本文

岩 坪 健

を優先するという中世以来の伝統に則らず、主に贈答歌がある箇所を選んでいる。そして絵師も山本春正画を一部見た程度で、源氏絵の知識はなく、本書の梗概本文に合わせて挿し絵を描いている。(注①の論文。傍線、筆者)

しかしながら、この文章には不適切な表現が見られる。というのは『藤の縁』は物語本文に手を加えた「梗概本文」(傍線部)であるのに対して、『源氏物語絵詞』は物語本文を抜き出しただけで、両者の本文は一致しないからである。これは『源氏物語絵詞』の本文が、源氏絵の詞書に利用するものであり、詞書は一般に梗概文を用いないためである。注①の前稿では専ら絵を考察したので、本文に関しては右記のような矛盾した書き方をしてしまった。仮に『藤の縁』が『源氏物語絵詞』のようなテキストを利用したとしても、それは絵の場面選定に限定される。そこで本文については、改めて本稿で

問題にする次第である。

## 二 源氏物語本文との関係

現代人が読んでいる源氏物語は、藤原定家が校訂した本文である。しかしながら『藤の縁』が出版された当時、流布していたのは、延宝三年（一六七五）に刊行された北村季吟『湖月抄』<sup>③</sup>であるので、本稿ではその本文と『藤の縁』とを比較検討する。両者が同文である箇所を捜すと、巻によってかなり異なる。<sup>④</sup>試みに源氏物語・第二部の八帖を分類すると、次のようになる。なお巻名上の数字は、巻の通し番号である。

- A 『藤の縁』の本文のほとんどが、『湖月抄』の本文と一致するのは三帖（35若菜下、38鈴虫、41幻）
- B 『藤の縁』の本文のほとんどが、『湖月抄』の本文と一致しないのは二帖（39夕霧、40御法）
- C 右のAとBを合わせ持つのは三帖（34若菜上、36柏木、37横笛）

Aは物語本文を抄出してつないだもの、Bは梗概文である。Cをさらに分けると、和歌とその前後の本文はA、他の部分はBに属する。ということはCは、歌を含む箇所を抜粋して、当該場面の粗筋を補足したことになる。このように連続する八帖においても、本文の作

成方法は一通りではない、ということが確認される。

## 三 梗概文と抄出本文

『藤の縁』は原則として、各帖に一組の贈答歌を載せるが、物語本文と一致するのは必ずしも和歌の近くにあるとは限らない。たとえば先の分類でCに所属する若菜上の巻を見てみよう。

- ① 女三の宮の御うしろ見、光君にあつけ給ふ。君もにげなくおほせと、院のたまはせ給ふも、もだしかたく、うけはり給ふ。② 紫のうへも、ことにふれて、たゞにもおほされぬ世の有様なり。かゝるにつけても、はなやかにおひさきとおく、あなつりにくきけはいにて、うつろい給へるに、なまはしたなく覚ざるれど、つれなくのみもてなして、いとらうたけなる御有様を、君はいとゞありがたしと思ひきこへ給ふ。③ 女君、

④ 目にちかくうつればかはる世の中をゆくすへとをくたのみける哉

⑤ と手ならいにし給へは、けにことほりとおほして、かく書そへ給いしとかや。

⑥ 命こそたゆともたえめ定めなき世のつねならぬ中のちざりを

当巻の全文を①～⑥に分けると、①は前の分類ではBに、②～⑥は

Aになる。すなわち①は粗筋で、それを受けて②以下の場面に移る。②は次に掲げた物語本文で、( )内を省略した文章に相当する。

たいのうへもことふれて、ただにもおほされぬ世の有さまなり。げに、かかるにつけても、(こよなく人におとりけたるることもあるまじけれど、またならぶ人なくならひ給ひて)はなやかにおひさきとほく、あなづりにくきけはひにて、うつろひ給へるに、なまはしたなくおほさるれど、つれなくのみもてなして、(御わたりのほども、もろ心にはかなきこともしいで給ひて)いとらうたげなるみ有さまを、いとどありがたしと思ひきこえ給ふ。(『湖月抄』若菜上の巻 777頁)

一方、③④⑥は次の物語本文と対応する。

(紫の上は)御硯を引よせて、

めにちかくうつればかはる世の中を行すゑとほく頼みける  
かな

ふるることなかきませ給ふを、とりてみ給ひて、はかなきこと  
なれど、げにとことわりにて、

命こそたゆとも絶えめさだめなき世のつねならぬ中のちぎ  
りを(同巻 729頁)

『藤の縁』の③「女君」に相当する語句は、物語本文には見当たらない。これは一首めの詠者を示すため、補われたのであろう。⑤は

『源氏絵本藤の縁』の本文

「げにことわり」の部分で、物語と共通するだけである。物語本文の「ふるることなかきませ給ふを、とりてみ給ひて、はかなきことなれど」を、『藤の縁』では「と手ならいにし給へは」と要約して、逆に物語にはない「かく書そへ給いしとかや」を補足している。

以上をまとめると、当巻の前半(①)は梗概文、後半(②④⑥)は物語本文の抜粋と分けられる。ここで問題になるのは、後半部分の②と③以下とが同一場面ではないことである。具体的に『湖月抄』の頁数で示すと、贈答歌の箇所(③以下)は729頁であるのに、その直前の文章(②)は777頁で、かなり離れている。このように和歌が詠まれた場面とは違う箇所から、なぜわざわざ抜き出したのであろうか。これは憶測するに、源氏物語の梗概書が用いられたからではなからうか。すなわち『湖月抄』で777頁に該当する物語本文と、729頁にある和歌とを抜き出した梗概書があり、その和歌と前後にある文章を、『藤の縁』は転載しただけ、と考えるのである。⑤以下、その仮説を裏付けてみよう。

#### 四 頭中将の性格描写

——『源氏大鏡』との共通点——

夕霧と雲居雁がなかなか結婚できなかつたのは、頭中将が許さな

かったからである。それを『藤の縁』では、頭中将の性格によると説明している。

夕きりの君、雲ゐのかり、御もろ恋の御中なれど、又おとゞき  
らくしき御心地に、御こゝろとけ給はさりしか、(藤裏葉の  
巻)

右の一節では、頭中将の人柄を「きらきらし」と評している。しかし、その語は当巻にはなく、別の巻に例が見出せる。

○人がらいとすくよかに、きらきらしくて、心もちゐなどもかし  
こく物し給ふ。(乙女の巻 244頁)

○きらきらしう物きよげに、さかりにはものし給へれど、限あり  
かし。(行幸の巻、510頁)

○ゆるゆるとことさらびたる御もてなし、あなきらきらしとみえ  
給へるに(行幸の巻 525頁)

乙女の巻の用例において、現代の注釈書は次の注を付けている。

以下、内大臣の人柄。「すくよか」は、剛直で意思を貫きとおす性格。「きらきらし」は、派手好みで、威儀を誇示するよう

な性格や態度。(『新編日本古典文学全集』32頁の頭注)

娘の結婚式は格式を重んじて執り行いたいのに、父親の知らぬ間に夕霧とできてしまい、盛大に祝えないのが癪に障り、二人の仲を認めたくない、と解釈できる。

この「きらきらし」という性格描写の語句を、『藤の縁』の著者が別の巻で見つけて、当巻に借用したと見るよりも、利用した梗概書の当巻にその語があり、そのまま引用したと考える方が、可能性は高いであろう。その裏付けとして、『源氏大鏡』を取り上げる。それは源氏物語の和歌をすべて収めた梗概書で、万治二年(一六五九)に「十二源氏袖鏡」の名で出版された。その藤裏葉の巻を見ると、頭中将を「きらきらし」と評している。

花をうちみあけて、ほゑみ給へり。いとけしきありて、には  
ひきらくしき大臣なり。(本文は「十二源氏袖鏡」の版本に  
より、私に句読点を付けた。以下、同じ)

これは頭中将が、自邸で催した藤の宴に夕霧を招待したときの一齣である。一方、『藤の縁』で「きらきらし」が使われている箇所は、夕霧を藤の宴に招く以前であるので、場面は異なる。とはいえ、源氏物語の別の巻よりも、梗概書と同じ巻から借用したと見る方が、蓋然性は高いと言えよう。

## 五 ほかの巻の粗筋

### ——『源氏小鏡』との共通点——

「きらきらし」という言葉のほか、『藤の縁』には別の巻の粗筋も混入している。たとえば東屋の巻では、薫の君が宇治に住ませた浮

舟のもとに、「おりふし」ごとにかよひたまひて」と書かれている。しかし当巻は、薫が浮舟を宇治へ連れて行ったところで終り、たびたび通つたのは以後の巻のことである。

このように他の巻の粗筋も述べるのは、梗概書では珍しいことではない。数ある梗概書の中でも最も流布して、江戸時代には何度も版を重ねた『源氏小鏡』の束屋の巻末を見ると、「さて、大将は、しはく宇治へかよはせ給ふ。」とあり、『藤の縁』と共通する。したがって『藤の縁』の編者が、源氏物語の別の巻に書かれた内容を要約した、と仮定するよりも、梗概書に他の巻の粗筋が記されていて、それを引用したと見なす方が無難であろう。

本節と前節をまとめると、『藤の縁』の本文には別の巻で語られることも盛り込まれており、それは『源氏小鏡』や『源氏大鏡』にも見られる。ということは、『藤の縁』の編者が源氏物語のほかの巻から引用したのではなく、編者が利用した梗概書には他の巻のことも記されていて、それを孫引きしたと推定される。

## 六 本文解釈——『源氏大鏡』との共通点——

雨夜の品定めで左馬頭が披露した話の中に、木枯の女と呼ばれる女性が登場する。彼女は左馬頭のほか殿上人とも付き合っていたが、そのことを左馬頭が気づいていなかったことは、物語から窺われる。

『源氏絵本藤の縁』の本文

問題は殿上人で、彼はこの三角関係を知っていたと見る説もあるが、『湖月抄』では知らなかったと注している。

○「師」馬の頭のかよふ事を此うへ人はしらぬ也。(『湖月抄』帚木の巻 99頁)

○うへ人、此女を馬頭が妻とはしらねども、いかさまにも此女人のかよふと聞いていへる也。(同巻 101頁)

このように解釈が揺れるのは、物語に明記されていないからである。『藤の縁』には、

左の馬の頭のかよひし女、またこと人に心かよはしけるに、此こと人、馬の頭のかよふかよゑるをしらで、馬の頭をともなひて、かの女のもとに行て、(帚木の巻)

とあり、『湖月抄』と同じ見解である。『藤の縁』の当巻には、源氏物語と一致する本文は見当たらず、巻全体が梗概文から成る。いつても、源氏物語の粗筋を記すだけではなく、前掲文のように本文解釈も載せている。これは編者が用いた梗概書にもあった、と想定される。というのは『源氏大鏡』にも見出せるからである。

今の殿上人も、むまのかみ、もとよりかよふ所ともしらす、又、馬の頭も此上人、心をかはしたるとも、しらすりけり。

『藤の縁』の編者が、たとえば『湖月抄』を読み、その注釈も盛り込んだのではなく、本文解釈を含む梗概書を利用したのであろう。

次の例も、同様に考えられる。『藤の縁』鈴虫の巻では、光源氏と女三宮とが和歌を詠みあう場面が採られている。まず光源氏が詠んだのち、

と、かう染なる御扇に、書つけ給へり。そのはしに宮、かくなく、かきそえたまふ。

とあり、源氏が書き付けた扇に女三宮も返歌をしたためている。しかし物語では、源氏は扇に書いたが、宮が何に記したかは分からない。

(源氏の和歌)と御硯にさしぬらして、かう染なる御扇にかきつけ給へり。みや、(宮の和歌)とかき給へれば、『湖月抄』鈴虫の巻 31頁)

宮も扇に書き添えた、と解釈する注釈書も梗概書も未見であるが、『藤の縁』の編者が利用した梗概書には、そのように記されていたと推定される。

## 七 人物の呼称——梗概書との相違——

これまでの考察により、『藤の縁』の本文は、物語から直接引用されたのではなく、梗概書によると考えられる。しかしながら『藤の縁』と梗概書には、相違点がある。それは光源氏の呼称である。物語では出世していくにつれ、呼び名も変わっていくのに対して、梗

概書ではおおむね「源氏」(「源氏の」も含む)で統一されている。たとえば全巻中、最長の若菜の巻において、『源氏大鏡』と『源氏小鏡』では、どのように呼ばれているかまとめてみた。

○若菜上「源氏大鏡」「源氏」十五例、「六条院」五例、「源氏の院」「おとど」各一例

「源氏小鏡」「源氏」五例、「六条院」三例、「源氏の院」「大臣」各一例

○若菜下「源氏大鏡」「源氏」十三例、「源氏の院」五例、「源氏の大殿」「院」各一例(「院」は心内語)

「源氏小鏡」「源氏」十例、「院」二例(うち一例は会話文)

「院」(「六条院」「源氏の院」も含む)という名称は、『源氏大鏡』と『源氏小鏡』では、光源氏が太政天皇になった藤裏葉(若菜より一つ前の巻)から使われている。よって、それ以前の巻々では、殆ど「源氏」である。これは一つの名に定めた方が、分かりやすいからである。

ところが『藤の縁』では、さまざまな名称が見られる。それらを四種類(A-D)に分類し、グループごとに呼称・用例数の順に列挙すると、次のようになる。なお「六条院」は二例あるが(胡蝶・野分)、これは建物を指すので除外する。

A、「おとど」「おとどの君」各一例

B、「源中将」「二例」、「源大将」「源氏のおとど」「源のおとど」

各一例

C、「君」十一例

D、「光(る)君」十四例、「源氏の君」七例、「源氏」二例、

「男」一例

Aは物語本文を抄出した一節にある。Bは物語では、当該巻の別の箇所似た呼称が見出せる。右に挙げた順に見ていくと、『藤の縁』では「源中将」という名称は、若紫と紅葉賀にある。物語のその二巻には「源中将」の例はないが、他の場面では「源氏の中将」と呼ばれている。梗概書は「源氏の中将」を「源中将」と簡略化したのであろう。ほかの三例（「源大将」「源氏のおとど」「源のおとど」）は、物語では同じ巻に「大将」「おとど」とあるので、梗概書は人物を明示するため「源(氏の)」を頭に付けたのであろう。Cの「君」は、一巻に光源氏の名が複数あるとき、二回め以降に用いられる。十一例のうち、「源氏の君」か「源のおとど」の次に出てくるのは一例ずつあり、残りの九例は「光(る)君」を受けている。以上のA〜Cをまとめると、抜き出した物語本文に名称があれば、そのまま用いるが(A)、ない場合は当該巻の別の箇所にある呼称を利用し(B)、一巻で二例めからは「君」(C)とする、となる。

『藤の縁』には、物語本文と梗概本文が混在しているため、一つの名に限定できないのである。

このようにA〜Cは説明がつくが、Dには規則性が認められない。Dの用例を順に見ていこう。まず「光(る)君」は、物語では桐壺(二例)・匂宮(一例)・手習(一例)の巻にしかない。匂宮と手習は亡き光源氏を偲ぶ場面に使われている。よって生存中の例は、桐壺の巻だけである。一方『藤の縁』では、空蟬から幻の巻に至るまで幅広く使われている。

次に「源氏の君」は、物語では桐壺―滯標と若菜上の巻に見られる。ただし若菜上の例は、「あるじの院は、猶いとわかき源氏の君にみえ給ふ」(763頁)であり、四十の賀を迎えた源氏の若々しさを称えた一文である。よって、これは特例で、源氏も二十八歳(滯標)までしか使われていない。ところが『藤の縁』では、滯標の巻以降の巻々(朝顔・胡蝶・野分・梅枝)、にも見られ、三十九歳まで用いられている。

次の「源氏」は、物語では七巻(桐壺―明石の五巻と匂宮・竹川)に見られ、匂宮と竹川は源氏の死後であるので、生存中の最後の例は明石の巻(時に二十八歳)である。「源氏」という呼称は、『源氏大鏡』と『源氏小鏡』では最多であるのに、『藤の縁』では二例(蛸・橋姫)しかない。蛸の巻では源氏は三十六歳で、物語より

も八歳上になる。

最後に「男」は、物語では五卷（末摘花・紅葉賀・花宴・賢木・明石）に使われ、最終例は二十八歳である。一方『藤の縁』には、二十九歳の関屋の巻にしかない。このようにD群の例はすべて、別の巻で用いられた用例を借用したものである。これに限らず『藤の縁』では、ほかの巻に見られる語句や粗筋が取り入れられているので（第四・五節、参照）、D群の例もそのように見なせよう。

ただし、関屋の巻における「男」の例は特異である。一般に梗概書は、人名を具体的に記すものである。たとえば御幸の巻において、物語では、

にしのたいのひめ君も立出で給へり。そこばくいとみつくしたまへる人の、御かたち有様を見給ふに、みかどのあか色の御ぞ奉りて、うるはしううごきなき御かたはらめに、なずらひ聞ゆべき人なし。（『湖月抄』行幸の巻 50頁）

とある箇所を、『藤の縁』は殆どそのまま引用している。

玉かつらの君も立出給へり。そこばくいとみつくし給へる人の御かたちありさまを見給ふまゝに、御かとのうるはしううごきなき御かたはらめに、なすらいきこゆへき人なし、と思し給ふ。物語本文と異なるのは、「西の対の姫君」を「玉鬘の君」に改めたこと、「赤色の御衣奉りて」を省略したこと、末尾に「と思し給ふ

を追加したことだけである。呼称を「玉鬘」に変えたのは、その方が分かりやすいからである。

ところが関屋の巻では逆に、抽象化されている。

おもへる女の、遠き国よりのぼれるに、ゆかしき男の旅の道なる関にて、行合たれど、しのぶれば、人しれず、むかしわすれねは、かくごちて、ゑしりたまはじとおもふに、かひなし。

「おもへる女」は空蟬、「遠き国」は常陸、「ゆかしき男」は光源氏を指す、という注釈がなければ理解しがたく、これでは梗概文とは言えない。この一文は、まるで伊勢物語のような書き方である。これによると、この巻だけ別の梗概書を利用したのかもしれない。これに限らず、『藤の縁』には複数の梗概書が使用されたため、光源氏の名称が多様多様であるのかもしれない。

#### 注

- ① 小稿「源氏絵に描かれた男女の比率について——絵入り版本を中心に——（上・下）」、『同志社国文学』61・62、平成一六年一月・同一七年三月。

- ② 『源氏物語絵詞』とは、『源氏物語』に通じた文化人が注文主の依頼に応じて、『源氏物語』全巻から絵にすべき場面を選び、その部分の物語本文を詞書として抄出するとともに、絵とすべき図様を詳細に記述して呈出したものである（片桐洋一氏編『源氏物語絵詞——翻刻と解説——』一三二頁、大学堂書店、昭和五八年）。



- ③ 本文は、有川武彦氏校訂『源氏物語湖月抄（上・中・下）増注』（講談社学術文庫、昭和五七年）を用いる。
- ④ 別稿において、『藤の縁』を全文翻刻して、それと一致する『湖月抄』の本文を巻ごとに列挙する予定である。
- ⑤ ちなみに藤原定家が源氏物語の和歌を選び、詠歌状況を詞書にまとめた『物語二百番歌合』も、源氏物語ではなく、梗概書の一つである源氏物語和歌集による、と推定される。詳細は小稿『源氏和歌集 解題』（冷泉家時雨亭叢書『大鏡 文選 源氏和歌集 拾遺（一）』所収、朝日新聞社、平成二〇年一月）参照。
- ⑥ 本文は『源氏小鏡』の版本で最も古く、本文も最善である無刊記本を翻刻した、小著『源氏小鏡 諸本集成』（和泉書院、平成一七年）による。以下、同じ。
- ⑦ 石田穰二氏「今宵人待つらむ宿なむあやししく心苦しき」（むらさき）19、昭和五七年七月。後に『源氏物語攷その他』所収、笠間書院、平成元年）。
- ⑧ 稲賀敬二氏「作中人物解説」（池田亀鑑氏編『源氏物語事典』下巻、東京堂出版、昭和三五年）を参照した。